「いたるところにある」が未来を開く？
自動販売機の来し方・行く末

「自販機大国」と言われるほど自動販売機が普及しているニッポン。なぜそこまで普及したのか？コンビニなどと競合する中で、どんな未来が考えられるのか――？日本自動販売システム機械工業会・主事の久下雄太郎さんに聞いた。

一般社団法人
日本自動販売システム機械工業会

1963（昭和38）年、自販機の製造事業者の業界団体として設立。自販機やATMをはじめとする現金取扱機器の総合的な進歩発展、普及促進などを目的として活動を続けている。

紀元前からあった!?

――日本自動販売システム機械工業会のホームページにある「自動販売機の歴史」というショートムービーを拝見したのですが、紀元前二一五年には既に自販機があったと知ってビックリしました。

世界最古とされているのが、コインを投入するとコインの重みで水が出てくる聖水自販機で、古代エジプトの寺院に置かれていたと言われています。ただ、現在の自販機に続くような、機械化されたものが出てくるのは産業革命後のイギリスで、ここから本格的な技術開発や実用化が進んだとされています。

――日本国内での最初の自販機というと？

一八七六（明治九）年、東京・上野公園に自動体重測定器が設置されたのが、日本での始まりと言われていて、一八九〇（明治二十三）年には、五銭銅貨を入れると蛇口から一合分のお酒が出てくるゼンマイ仕掛けの酒自販機もありました。

現存するもので最古の自販機は、一九〇四（明治三十七）年に発明家の俵谷高七が考案した「自動郵便切手葉書売下機」で、郵政博物館に所蔵されています。これは上半分の右側が切手、左側がハガキの自販機になっていて、下半分はポストになっています。要は自販機の機能とポストを一体化させたわけです。

その後、大正時代に入ると、袋入りの一銭菓子が買える菓子自販機や入場券自販機といったものが出てきました。一九三一（昭和六）年には、「発声映写装置付グリコ自販機」なんてものも作られました。江崎グリコの創設者である江崎利一が考案した自販機で、機体に小さなスクリーンがついており、十銭を入れると蓄音機が音楽を鳴らして、活動写真が映った後、グリコのお菓子と釣り銭が出てくる仕掛けです。

――ポストと一体になっていたり、ミニ映画が観られたり、昔の自販機はモノが買える利便性だけに留まらないところがユニークですね。そんな時代を経て、いまでは自販機大国と言われるほど自販機が普及しています。

やはり、一九六〇年代に飲料の自販機が出てきたことが大きいのではないかと思います。

普及の牽引役は飲料自販機

かつてはお菓子やたばこといった自販機が中心で、一九五八（昭和三十三）年にはチューインガム自販機なども登場しましたが、こうした物品自販機は台数としてはそれほど増えませんでした。

その後、一九六二（昭和三十七）年に海外の大手飲料メーカーが瓶コーラの自販機を日本に導入して、以降は飲料自販機が次々と増えていったとされています。それ以前だと「噴水型ジュース自販機」がありました。

――覚えています……。容器の中で、ジュースが噴水みたいに噴き出している自販機ですよね？

そうです。十円入れると紙コップにジュースが出てくるという。

――懐かしい！　こう言うと年齢がわかってしまいそうですが（笑）。紙コップだったものが瓶で買えるようになり、やがて缶が出てきてペットボトルへ――こうした容器の変化も飲料自販機の普及につながっていったのでしょうか。

容易に持ち運べる容器の開発が影響した面もあると思いますが、いちばんの要因は同じ自販機でホットとコールドを販売できる機能がついたことですね。

それまでは冷やす機能しかなかったのですが、冬はホットに切り替えることができる「ホットorコール